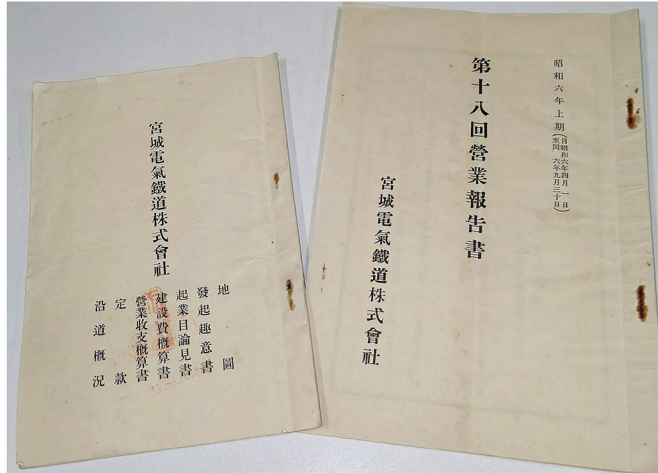


大正11年発起趣意書と昭和6年の営業報告書(本間英一氏所蔵)



宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長 **平川 新**

未来への航路

宮電の石巻延長が悲願

前回、石巻軽便鉄道で東北本線の小牛田駅と石巻がつながったことを書きました。続いて仙石線の前身である宮城電気鉄道(宮電)のことを調べ始めたとのこと、東北大学鉄道研究会が2012年の大学祭で仙石線について研究発表した資料を見つけた。

そこには、大正10(1921)年の仙台・松島間の敷設申請に続けて、翌年、松島・石巻間の区間延長を申請したこと、その際に石巻の本間半兵衛などが石巻への協力を申し出たという記事がありました。

そこで石巻市門脇

た。半兵衛は石巻本間家の三代目。初代の蒲兵衛は幕末に仙台の蒲生から石巻に来て、明治七年に酒造業を始めたのことでした。

孫の半兵衛は、大正5年の石巻長者番付では大関にランクされています。昭和10年に発行された『功績録』(石巻市役所刊)には、七十七銀行の重役を務めたほか、石巻製水会社、金華山軌道、石巻運

輸造船、東北電灯会社などの創設にも尽力したとあります。大正年間の日和山公園整備では、1600坪の所有地を寄付しています。

本間さんの祖父の儀

⑪ 仙石線と石巻

兵衛は宮電の取締役として、本間家をはじめとする石巻経済界の有力者たちが大きな力を発揮したようです。

北上川の改修によって流域からの農産物の集積が進み、金華山沖の大漁場から石巻港への漁船の入港も増えただけで、路線延長をバネにさらなる石巻の発展を期したのでした。



宮城電気鉄道敷設申請路線計画図(大正11年) 小野・石巻間部分。赤の点線が予定路線(本間英一氏所蔵)

は、余剰電力を活用するために同商會が電気鉄道を計画したのでした。発起人187名には、宮城県の有力者が名を連ねていますが、大正12(1923)年の関東大震災で打撃を受けた高田商會が倒産してしまいました。その苦境を乗り切って、同14年(1925)年には仙台・西塩釜間が開通

昭和3(1928)年には石巻まで全通して、昭和15(1940)年段階で、仙台・塩巻間は15分ごと、仙台・石巻間は1時間ごとの運行でした(『石巻の歴史』第5巻。仙台・石巻間が全通したこと、昭和10年代の石巻駅の旅客は年間20万人台になり、貨物も大きく伸びています。経済効果は抜群でした。

敷設申請の路線図を見ると、小野からは沿岸ルートが予定されており、石巻駅も実際の駅とは異なる場所になっていたようです。事業進行にあたり路線や駅の変更があったことがわかります。

その後、昭和19(1944)年に戦時特別措置によって国に買収され、仙石線と

宮電延長と石巻の活況

宮電は電気鉄道となりますように、電気でモーターを回して走ります。電力は、江合川の水を利用して発電した江合水電会社(大崎市岩田山下一栗)から供給されました。明治後半から大正年間にかけて、全国的に水力発電の会社が設立されていますが、江合水電もその一つでした。電力も近代化を促進する大



ひらかわ あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。館長に就任した。

東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26・31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月、3代目のサン・ファン館長に就任した。